TEIKOKU DATABANK Historical Museum

Muse

2016.6
Vol.27

帝国データバンク史料館だより［ミューズ］

温故知人 08

樺太からサハリンへ、71年目の夏

あの時代から遠く離れて
いま、語り継ぐことの難しさ

サハリン日本人会会長
サハリン残留日本人1世　白畑 正義さん

《逸品解題》甲州手彫印章・雲州そろばん・八女福島仏壇

事業所のあった街をたずねて（特別版）～北京篇～

白畑 正義さん
1939年、旧樺太能登呂村内砂生まれ。6歳で終戦。その後、留多加を経て、泊居に転居。15歳でソ連国籍取得。17歳から一時兵役を挟んで長年営林署に勤務。1999年定年退職。2009年からサハリン日本人会会長。

樺太からサハリンへ、71年目の夏

あの時代から遠く離れて いま、語り継ぐことの難しさ

サハリン日本人会会長
サハリン残留日本人1世　白畑 正義さん

■サハリンに骨を埋めた残留日本人

日本では、もう「樺太」といっても、それが何のことなのか、全く分からない人がずいぶん増えたと思います。北海道宗谷岬からわずか40㎞、晴れた日には肉眼でも見えるくらいの距離なのに、近くて遠い島の歴史に思いを寄せる人は、すでに大半が80歳を超えているのではないでしょうか。

現在、サハリンと呼ばれているこの島には、1945年8月、ソ連が軍事行動を起こすまで約40万人の日本人が住んでいました。49年までには、たくさんの日本人が集団引き揚げで本土に戻りましたが、戦後の混乱期でもあり日本に帰れず、当地に残らざるを得なかった人も少なくありませんでした。現地に留まった人たちは、主に鉄道や炭坑、林業、製紙業そして公務に携わっていた人とその家族でした。

サハリン残留日本人の日本への帰国事業は、その後、永住帰国、一時帰国を含め、関係者の必死のご尽力で進められ、帰国者は現在まで累計でおよそ2,000人を数えますが、半面、故国を見ることなく、当地に骨を埋めた方もおられます。例えば、朝鮮半島の出身者と結婚した日本婦人は、夫である韓国人、朝鮮人は帰還対象ではなかったために、家族離れ離れになって、自分ひとりだけが帰国することはできなかったのです。

■18歳で兵役、その後は定年まで営林署勤め

私もサハリン残留日本人1世です。1世というのは、日本統治が終わった1945年以前に生まれた世代のことで、私は39年11月、アニワ湾に面した能登呂村内砂というところで生まれました。アニワ湾はサハリンの南部に位置し、宗谷海峡に向かって開けています。湾岸には大泊(現コルサコフ)という大きな町がありましたが、内砂は幅5m余りの留多加川の岸辺にあった小さな集落でした。

両親がいつ樺太に渡ってきたのかはっきりしません。父は1895(明治28)年生まれなので、多分1910年代の半ばごろではないでしょうか。

父は山形県出身、母は仙台出身です。終戦の年は、私がまだ6歳だったので、当時のことはあまり記憶に残っていませんが、父は郵便局で電話線の修理をしていたようです。もちろん日本に帰国する気持ちは強かったでしょうが、当局からの指示によって戻るに戻れず、結局、74年に79歳で亡くなるまで、一度も日本の土を踏むことはありませんでした。母はすでに64年に亡くなっていました。

内砂を出たのは私が7歳のとき。留多加というアニワに近い町に行き、2年後には父の仕事の関係で泊居(現トマリ)に移りました。間宮海峡に面した樺太西海岸、真岡(同ホルムスク)から北に行ったところにある町です。日本が統治していた時代は港町として栄え、王子製紙の工場やビール工場もあり、大変活気がありましたが、いまはせいぜい人口1万人くらいでしょう。

私は日本の小学校は1年生のときまでで、それからはソ連の学校に通いました。ソ連の学制は最初が7年間、それから3年間、合わせて10年間です。日本でいえば、中学から高校にあたります。17歳で学校を卒業し、営林署で働き始めました。18歳のときに兵役に就き、2年経って、また営林署で植林と山林監視の仕事を続け、99年、60歳の定年まで勤務しました。ソ連国籍は私が15歳のときに取得しました。両親がソ連国籍を取ったからです。

王子製紙豊原工場跡(ユジノサハリンスク)

■娘の夫が戦死、リアルなこの国の現実

1966年、26歳のときに同じ残留日本人と結婚し、娘がふたりできました。長女はロシア人と、次女は韓国人とそれぞれ結婚しました。サハリンは多民族が共生しており、ロシア人、韓国人と結婚するのは極めて普通のことです。孫が3人おり、ロシア人、韓国人とのハーフです。

ただ、娘の夫はふたりとも早くに亡くなりました。長女の夫はチェチェンとの戦争に従軍し、そこで殺され、韓国人の女婿は病に倒れました。リアルなこの国ならではの現実かもしれません。91年にロシアが成立し、国籍も自動的に変わりました。ソ連が崩壊するとは思っていませんでしたが、それほど驚きもしませんでした。ただ、ペレストロイカで暮らし向きが良くなると思ったのに逆に悪くなりました。仕事の内容も給料も以前と同じなのに、物価がものすごく跳ね上がったのです。

そして2007年11月に女房が亡くなり、いま私は長女の一人娘、孫とふたりで暮らしています。

■日系は増えても、どんどん遠くなる日本

私が日本人会の会長を引き受けて6年になります。会員は約120人、1世が40人ほどで2世と3世も入っています。日本人会の集まりは1年に1回。普段は一時帰国する人の連絡係です。

この会は1990年にできましたが、実は、私自身は一時帰国したことがありませ

サハリンの州都、ユジノサハリンスク全景

ん。まだ日本を見たことがないのです。ソ連時代は日本に行くことがとても難しかったし、90年代はサハリンの景気が特に悪かったときでした。アスファルトの道路もなかったし、お店も少なかった。モノが買えないというか、品物自体がありません。サハリンは貧困生活、それに比べると日本は富豪の生活だと思っていました。

現状、日本人会の大きな問題は会員が少なくなっていること。3世には日本語が通用しませんし、2世もきちんと話せない。1世だってもう忘れかけています。私も孫とはロシア語で会話しています。そうしたこともあり、これから日本人会を維持するのは大変でしょう。3世が自分たちでやるしかありませんが、サハリンにいる日系ロシア人は増えてきたけれど、逆に日本が遠くなっているのが実情です。1世のほとんどはもう80代後半、90歳以上もひとりいます。その人は日本に一時帰国したのですが、10年ほどで戻ってきました。日本には身寄りがいない、家族もいない、老後を見知らぬ土地で生きていくのはつらかったのでしょう。サハリンに戻ってきて、いまはやはり孫と暮らしています。

■家族にも伝えにくい残留日本人の経験と記憶

これまでの人生を振り返って幸せだったか、大変だったか、と聞かれても、うまく答えが出てきません。樺太時代の幼児体験とその後のこと、いろいろ苦労したのも事実ですが、それはある意味では残留日本人の宿命で、半面ではささやかな幸せな暮らしもありました。

もちろん当時の記録や資料はたくさん残っていると思いますが、樺太、ソ連、ロシアと変化の激しい当地で否応なく暮らしてきた日本人一人ひとりの記録は、多分公文書館に行ってもそう多くはないでしょう。結局、残留日本人の記憶を繋いでいくのは、最も身近にいる家族しかいませんが、その家族もなかなか興味を持つのは難しい。日系ではあっても、ロシアで生まれ、育ち、暮らし、ロシア人として生きているからです。

私自身、孫と日本について話をする機会はほとんどありません。私が日本をこの目で見たことがないからかもしれません。逆に孫は日本に1年間留学しましたが、やはり普段の暮らしの中で日本を話題にすることはないし、残念ではありますが、私の経験や記憶を孫に伝えることも相当ハードルが高いと感じています。

日本時代の「郷土博物館」。現在も博物館として使われている。
豊富な資料展示がされているが、もちろん個人史の記録はない。

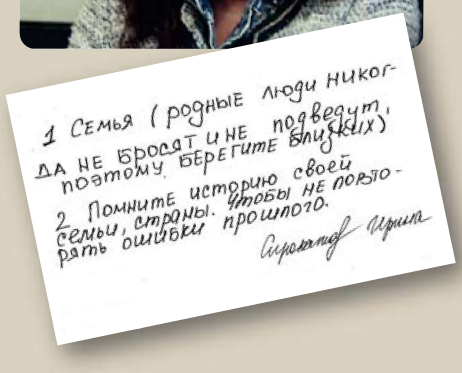
シロハタ・イリーナさんの話

ルーツは日本でも、私のアイデンティティーはロシア人

私はサハリン国立総合大学東洋学部を卒業後、日本でいう学士入学によって、いまは法学部に在籍しています。東洋学部3年のときに九州大学に1年間ほど留学しました。日本は明治維新によってサムライの時代から一気に近代化を進め、欧米文化を取り入れながら、一方では日本固有の習慣や伝統を守りました。そのことに関心を持っていました。

1905年、日露戦争の後、多くの日本人が南サハリンに移住してきました。その中に私の曽祖父母もいて、やがて祖父が生まれ、母が生まれ、私がいまここにいます。45年、ソ連の軍事行動以降もいろいろな事情でサハリンに残った日本人がいることは祖父からもよく聞かされていました。

しかし、私のルーツはそうであっても、私自身はロシアで生まれ、育ち、ここで教育を受けました。やはり私のアイデンティティーはロシア人です。だから正直に言えば、祖父の生きてきた時代を自らのこととして真正面から深く考えたことはありません。もちろん、日本の文化は私の暮らしのどこかに残っており、そのことは意識していますが、やはり先祖をさかのぼるのは難しいですね。祖父、祖母は知っていますが、写真すら残っていない、その前の世代は全く分かりません。サハリンで、私の家族史を調べることは大変難しく、結局、家族の会話の中から多くを聞き出すしかないのかもしれません。



1 Семья (родные люди никог-
да не бросят и не подведут,
поэтому берегите близких)
2 Помните историю своей
семьи, страны, чтобы не повто-
рять ошибки прошлого.
Сироватф Ирина

1. 家族（親類は絶対に、あなたを見捨てたり期待を裏切ったりはしません。ですから、親類は大切にしてください）
2. 自分の家族や国の歴史を忘れないでください。過去の過ちを繰り返さないために。

シロハタ・イリーナ

監訳：大森 雅子（立教大学、東京大学講師）

逸品解題

今号から「逸品解題」新シリーズとして、
わが国の地場産業が生み出す伝統的工芸品を取り上げる。
日本人の生活に密着、ものづくりニッポンの礎を
築いた「地の知」ともいうべき逸品を通して、
産地の現状をお届けする。

山梨県 甲州手彫印章

島根県 雲州そろばん

福岡県 八女福島仏壇

水晶にルーツを持つ甲州手彫印章

山梨県は日本有数の水晶の産地であった。江戸時代後期になると京都の職人から水晶の加工を学び、甲州にも工房が誕生。明治になり政府が民間の鉱山開発を認めると、水晶の産出量が増加し、採掘業者、研磨職人、小売業者などに分かれ、産地を形成した。

１８７３（明治６）年の太政官布告で国民が実印を使うようになり、印章の需要が高まる。そこで六郷町（現市川三郷町）のセールスマンが水晶の印材を携えて全国へ出張販売し、印章の注文を取るようになった。六郷町はもともと足袋の製造が盛んで、行商人たちが全国に販路を持っていたのだが、足袋の需要が減少。そこで足袋に代わり印章の行商を始めたという。このような経緯があって山梨県は全国にも例のない、手彫印章の産地になった。

甲州手彫印章は２０００（平成12）年に伝統的工芸品の指定を受けた。水晶・水牛・つげいずれかの印材を使い、10～15に及ぶ製作工程は全て昔ながらの道具と技法を用いた手作業である。甲府市内で印章店を営み、職人歴60年の横森省三さんは「はんこは芸術品ではありません。自分の意思を表明する、あるいは自分を証明するためのものです。そして、そのときに重要なのが、押された“印影”です。手彫りでは全く同じ印影は二つとありません」と語る。

印章業界も、機械化による大量生産や価格競争、チタンなど新素材の登場といった時代の変化に対応する中で、伝統の技で仕上げる手彫印章が占める割合は年々減少しているという。横森さんによれば「県内の組合員で手彫りをしている生産者はピーク時で６００人はいたと思いますが、現在は恐らく１００人程度」にすぎない。

水晶鉱脈という恵まれた地質環境をルーツに、その研磨技術から興った甲州手彫印章だが、地産原石が枯渇した現在も、山梨県の地場産業を支える地道な活動を続けている。

山梨県印章店協同組合
■山梨県笛吹市石和町四日市場1569（山梨伝統産業会館内）
■TEL: 055-262-9778
■http://www.chuokai-yamanashi.or.jp/bussan/archives/1055

品質にこだわって生産される雲州そろばん

島根県の奥出雲町は良質の砂鉄が採れることから、たたら製鉄の操業が盛んだった土地である。この地の製鉄所では最高級の鋼である「玉鋼」がつくられ、一帯では良質な刃物を使った木工技術が進歩していった。

江戸時代後期、地元の素封家からそろばん修理を依頼された宮大工の村上吉五郎は、その精巧なつくりに関心を持ち、自らそろばんづくりを始める。これが雲州そろばんの始まりとされている。特筆すべきは、そろばんの玉をつくる「珠削り用足踏みろくろ」を考案したことだ。手作業で削り出す玉に比べて大きさが規格化され、使いやすさや品質が飛躍的に向上、ここに今日に続く質の高い雲州そろばんが誕生した。

江戸時代、奥出雲を含めた中国地方は国内最大の鉄の生産地になっており、他国から数多くの商人が当地を訪れるなど、経済活動が活発であった。雲州そろばんの伝統工芸士であり、現代の名工にも選ばれた内田文雄さんは「鉄を買いに来た商人が帰りに良質なそろばんを買っていくケースが多かったのではないか。そろばんは商人の必需品ですから」と話す。明治時代に入ると、村上朝吉が改良型ろくろを完成させた。朝吉

しかし、大量の需要に応えるために生産効率の向上を目指した分業化が、逆に職人育成の足かせになっているという皮肉な状況を生んだ。

昭和50年代初めの全盛期には奥出雲町から年間１００万丁のそろばんが出荷されていたそうだが、いまでは5万丁余りでその多くが珠算塾向けである。雲州そろばん協業組合ではそろばんの木

●雲州そろばん
左・内田文雄作（現代の名工・伝統工芸士）
右・村上吉五郎作（雲州そろばんの祖）

雲州そろばん協業組合
■島根県仁多郡奥出雲町下横田76-5
■TEL: 0854-52-0839
■http://unsyusoroban.com/

九州仏壇の源流、八女福島仏壇

日本に仏教が伝わったのは6世紀ごろであるが、仏壇が各家庭に広まったのは、17世紀前半の江戸時代初期である。江戸幕府による寺請制度が実施され、全国各地で仏壇が製造されるようになった。現在、仏壇は15産地で国の伝統的工芸品に指定されている。

そのひとつが福岡県八女市の八女福島仏壇である。名前に由来する八女市中心部の旧福島町は城下町だったことから、職人や商人の集まる在方町として町が形成されていった。福島町の職人である指物大工の遠渡三作が、1821（文政4）年に荘厳華麗な仏閣の夢を見たことから、同業者だった井上利久平、平井三作らと共に仏壇製造を志したのが最初といわれている。50年ごろには製造技術も確立され、九州仏壇の源流となった。部分品の一つひとつが手仕事で美しく仕上げられる漆塗りや、細部まで施された金箔など、荘厳で格調高い塗り仏壇である。

八女福島仏壇の製作は大きく6部門に分けられ、それぞれ専門の職人によってつくられる。全工程は80余に上り、ほとんどが手加工で行われ、伝統技法が継承されている。そのため量産化はせず、小売りという販売手法をとっているという。個人用の仏壇だけでなく、寺院向けの大型仏壇の受注が多いのも特徴である。

八女福島仏壇は、1977（昭和52）年に伝統的工芸品に指定された。当時の従事者数は92名だったが、現在は3分の1まで減少している。後継者減少については、少子化に起因するものもあるが、八女福島仏壇仏具協同組合理事長の鶴信行さんは「宗教用具である仏壇に関心を持つ機会がほとんどなく、こうした産業の存在が広く知られていないのが現状です」と、その一因を語る。

八女福島仏壇が伝統的工芸品に指定される要件は、製造に必要な6部門がそろっていることであるが、技を引き継ぐ後継者が育っていない部門もあるという。200年に及ぶ八女福島仏壇の歴史を途絶えさせないための取り組みが続いている。

●甲州手彫印章
印材として黒水牛、白水牛、つげ、水晶が使われている

は技術を公開し、それまで秘伝とされ、限られた職人にしかつくれなかった雲州そろばんを地場産業に成長させる基礎を築いた。

雲州そろばんの製造工程は187と非常に多い。「かつては原料の調達に始まり全工程をひとりで行うのが主流でしたが、現在は分業化されています」（内田さん）

工技術を応用し、奥出雲ブランドの家具生産に力を入れる一方で、後継者育成については「担当している工程だけなら、3～5年もあれば技術の習得はできると思いますが、ひとりで完成させられるようになるには年月が必要です。いまのうちに後継者を育成し、技を繋いでいかねばというところです」（内田さん）。

●八女福島仏壇
全部門が伝統工芸士によってつくられている

八女福島仏壇仏具協同組合
■福岡県八女市本町2-123-2
■TEL: 0943-24-3941
■http://yamebutsudan.or.jp/

事業所のあった街をたずねて（特別版）

70年余前の記憶を湛える四合院と胡同に佇む

北京篇

什刹海北河沿10号　（旧北京支所所在地）付近

什刹海北河沿10号　旧北京支所への入口

什刹海に残っている旧北京支所の建物

1937（昭和12）年7月7日夜半、
北京市郊外の美橋・盧溝橋近くで一発の銃声が闇を貫いた。
その瞬間、日中全面戦争の火ぶたが切られた。
そして戦火は瞬く間に全土に拡大し、
橋を渡った旧日本軍は、一気に北京市内に入城。
8月には河北省張家口を、11月には山西省太原を、
そして上海、南京（江蘇省）、済南（山東省）など、
激戦を繰り返しながら各地を次々と武力制圧した。
帝国データバンクの前身である
帝国興信所の北京支所開設は
39年8月、盧溝橋事件から丸2年が経っていた。

■相次ぐ企業進出、支所開設に拍車

帝国興信所北京支所が新設されたころ、中国戦線はすでに奥深く広がっていた。旧日本軍が占領した地域では軍政を何とか軌道に乗せ、民間資本の投下、企業進出にも拍車がかかり、金融、商社などの拠点開設が相次いだ。

帝国興信所は、1939（昭和14）年5月に、まず北京の海の玄関と言われた天津に支所を開設。翌6月には当時日本で「満州」

景山から見た故宮全景。北京市の中心部に位置する。什刹海にあった旧帝国興信所北京支所は、写真の右手手前方向、約2kmのところにあった。

と呼ばれていた中国東北部の遼寧省奉天（現瀋陽）に、そして年末までに同吉林省新京（同長春）、同黒竜江省哈爾浜、華北部の山東省済南、青島および北京を含めて計7事業所を設置した。

北京支所は最初、「北京市什刹海前海北河沿10号」にあった。市中心部、故宮の西北に位置する元代から続く人造湖のひとつ、前海に面した幅5mほどの道路が1kmにわたって、緩くカーブを描くほぼ中央に位置している。歴史に詳しい中国国家档案局の元研究館員（政策法規司副司長）、李向罡女史によると、一帯には明・清代の歴史遺産が数多く残っており、歴史家にとってはかけがえのない研究対象が密集している。

いまから20年前までは、高さ2mほどの老朽化した塀で囲われた家並が続き、道端では地元の老人がゲームに興じ、あるいは散策する人をまばらに見かける程度だった。それが北京オリンピックを契機として、急速に開発整備され、いまでは自然景観と文化景観を併せ持つ一大観光地と化し、また、前海に沿って現代風のおしゃれなカフェ、バーが立ち並ぶ若者の街として、内外から大勢の人々が集まる人気スポットになった。

■ひっそり向き合う4軒の老朽建物

旧北京支所の建物は、什刹前海と後海の境目に架かる銀錠橋から徒歩5分ほどの場所に80年近い歳月を超えて残っていた。通りに面した部分は、派手な色で塗り固められた看板が目立ち、一見しただけでは、そこに解放前の建物があるとは全く分からない。

什刹海北河沿のほとり。
いまでは、内外からの観光客でにぎわう北京の名所となった。

幅1mほどの出入り口から中をのぞいて、恐る恐る足を踏み入れると、そこには修復された跡が目立つが、小さな家屋がひっそりと佇んでいた。北京の伝統的な民家、「四合院」である。塀で囲われた矩形の場所に、庭を中心として、石と煉瓦の住宅が4軒、向かい合うように建っている。

本来は、庭を挟んで北側に位置する南向きの建物に一家の長が、その両脇の家には息子夫婦など家族が、そして南側に建つ北向きの家は使用人が住んでいたという。もちろん日本が当地を占領して以降、この辺りの四合院は下宿や事務所として使われるようになり、北京支所もそのうちの1軒を借り上げたと思われる。

当時、北京で発行されていた日本企業の商工名鑑。『北京商工名鑑』昭和14年版では、興信所は「調査、研究所」でくくられ、帝国興信所は1頁広告を掲載した。なお、誌名はその後『北京日本商工名鑑』に改称した。

北京支所の存在は、現地の図書館が保存していた当時の記録からも明らかである。北京日本商工会議所が発行した『北京商工名鑑』昭和14年版には、「調査、研究所」でくくられた項に「全世界的調査機関／帝国興信所」の1頁広告が載っており、企業概要、営業案内と共に主要支所の所在地と電話番号が記載されていた。

「北京支所は狭苦しい所でしたが、中国本土に点在する支所を束ねる根城になっていたようです。親父が家にいた記憶はほとんどありません。必要なポイントを所員に指示して、後の調査は任せ、自分は管轄する事業所を飛び回っていたようです」

これは北京支所初代支所長、倉橋琢郎の長男、昭氏の話である。倉橋琢郎は函館支所長から抜擢され、最初、天津支所に赴任、その後、北京に異動して「北支」代表も兼ねていた。

■取り残された路地、胡同の残影

北京支所は開設後1年余り経った1940（昭和15）年11月、什刹前海から新簾子胡同に移転した。「北京の建物には門があり、そこを入れば何軒か小さな建物があって、中国人の家庭もありました。しかし、どこも家の中はとにかく狭かったですね」と語っていたのは、元北京支所調査員の福岡実（故人）である。業務を拡張し、業容の一層の充実発展を期したというが、手狭であったことは変わらなかった。

東新簾子胡同8号　旧北京支所家屋の一部

実は、新簾子胡同に移転した支所の具体的な所在地は、戦後長く、特定することができなかった。前述の『商工名鑑』の各版にも社内の記録にも、住所は「北京市城内二区新簾子胡同」とあるだけで、番地までは明記されていない。「胡同」は単に「路地」を意味するだけだ。市内の幹線道路、長安街から南に2筋下ったところに、新簾子胡同が東西にそれぞれ1㎞近くも延びていて、確かめようがなかった。

それが古い資料を整理しているときに、偶然、帝国興信所2代目所長、後藤勇夫が44年11月、中国へ渡航するための身分証明書の発行申請書（控え）を発見。それに「北京市二区新簾子胡同後細尾後門八号」と記載されていたことから、現在の住居表示では「東新簾子胡同8号」であることが分かった。

現地は、市内中央部の天安門広場の西側、国家大劇院と道を挟んで接する幅約5mの西に長く延びる路地に面した狭い四合院であった。市内の胡同は北京オリンピックを契機に観光用として保存する以外は大半が再開発により消えたと言われていたが、地元住民の話では、この一帯は塀や公衆トイレが真新しくなっている以外は、ほとんど何も変わっていない。

特定できた旧支所所在地に残る4軒の建物も、70年以上の年月を耐えてきたことを物語るように疲れきっていた。聞けば、この胡同にはトイレのない家もあり、不便極まりなく、従って新規に居住する人はほとんどいない。多くが長年住みつき、移転しようのない人ばかりでお年寄りが目立つ。そうした中で、道路で縄跳びをしている子どもを見かけ、その人懐こい笑顔に、なぜかホッとした気分になった。

路地で遊ぶ子どもたち。旧北京支所のあった東新簾子胡同にて。

【余話】

北京支所は開設後、約6年で閉鎖のやむなきに至った。しかし、この間、内地事業所が次々と罹災する中、上海支所と共に帝国興信所の屋台骨を支える時期が続いた。1944（昭和19）年12月度の調査件数は163件で、東京、大阪、名古屋、神戸に続く事業所第5位の成績に上昇。また収入高も45年3月度の記録では、空襲にあえぐ国内本支所を大きく上回る4万8千円近くを売上げた（上海：約50万8千円、東京：約3万1千円）。

『別冊Muse2015』 ― 記憶と記録 ― 紡ぐ、結ぶ、伝える

■巻頭特別取材　近くて遠い島、「樺太」から「サハリン」を訪ねて

・**「残された資料を集めて守り、伝えて役立てる**
～日本統治時代の“カラフト”アーカイブズ～」
国立サハリン州公文書館館長：ラリーサ・ドラグノーワ

・**「極東サハリンに刻まれた時代の記憶、誰に託して、伝えるか**
～４つの国を生き抜いた、ある離散家族の記録～」
サハリン残留コリアン１世：趙応奎（チョウ・ウンギュ）

■クローズアップ

・**「ひめゆり学徒隊と沖縄戦～その記憶と体験を語り継ぐ重たい使命～」**
公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団 ひめゆり平和祈念資料館館長：島袋淑子、
副館長：普天間朝佳、説明員：仲田晃子

・**「語り継ぐ《満蒙開拓》の歴史～資料を集めて、証言を記録、不都合な史実も伝える～」**
一般社団法人満蒙開拓平和記念館専務理事：寺沢秀文

・**「被爆体験“伝承者”、記憶を語り継ぐ役割とその責任～アクションを起こすきっかけをつくる、それが私の使命～」**
「被爆体験伝承者」養成事業第１期生：保田麻友

■異色対論

・**「記憶と記録を受け継ぎ、“あの日、あのとき”を伝える～私たちが“戦争とアーカイブズ”に向き合う理由（わけ）～」**
株式会社データ・キーピング・サービス常務執行役員：渡邊健 × 公益財団法人政治経済研究所付属東京大空襲・戦災資料センター主任研究員：山本唯人

・**「―父から娘への伝言― 父の生きたあの時代、私が生きるこの時代～世代を越えて語り継ぐ、仕事のこと、家族のこと～」**
ゴルフダイジェスト社主幹：中村信隆 × 小学館児童・学習編集局『幼稚園』編集部：野田真菜

・**「～作品を見る、著作で語る～記憶に迫り、記録と資料をどう読み解くか」**
作家／前東京都知事：猪瀬直樹 × フリージャーナリスト：岩瀬達哉

■特別論稿

・**「クリオはいかにして戦争を伝えるか？―ボスニアの戦後20周年を記念して―」**
東洋英和女学院大学専任講師：町田小織

・**「記憶の声、記録の音―声の継承、音の保存―」**
学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻博士後期課程在籍：宇野淳子

■Talk Session　白熱メッセージ

・**「記憶から記録へ～訊ねて、聴いて、紡いで、残して、伝えること～」**
企業史料協議会理事／元花王ミュージアム・資料室長：上田和夫　企業文書館学芸員／アーキビスト：中臺綾子
公立博物館学芸員／アーキビスト：佐藤正三郎　公益財団法人渋沢栄一記念財団事業部情報資源センター：松崎裕子

■Muse Special Guest　小谷允志さん

・**「記憶が消えても、記録は残る～この道４半世紀、思えば遠くに来たものだ～」**
株式会社出版文化社アーカイブズ研究所所長／記録管理学会元会長：小谷允志

反響続々！『別冊Muse2015』

2015年12月に刊行した『別冊Muse2015』へ、多くのご感想をお寄せいただいています。

「単に“戦後70年”という節目的な特集ではなく、何か新しいものを感じます」

「歴史に学ぶ大切さをこもごも強調され共感することが多かったです」

「記憶の風化、記録の散逸を防ぐことの困難を思い、この企画に深い意義を感じました」

「今後いかに記憶や記録を後世に伝えていくかについて奮闘している姿に感銘を受けました」他、

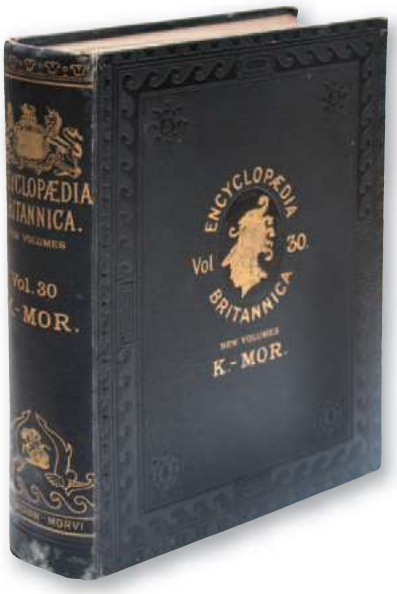
たくさんの温かいお言葉をありがとうございます。

本誌は、戦後70年の時を刻んだ2015年にちなみ、「記憶と記録　紡ぐ、結ぶ、伝える」を主要テーマとしています。

「記憶と記録」を軸に、時を超えて伝えていくことの難しさ、だからこそ記録を残すことの大切さに迫りました。

入手ご希望の方は、電話（03-5919-9600）か
メール（shiryokan@tdb.co.jp）にて
帝国データバンク史料館まで
お問合せください。

TEIKOKU DATABANK Historical Museum
Muse 2016.6 Vol.27



表紙のご案内

『THE NEW VOLUMES OF THE ENCYCLOPAEDIA BRITANNICA』
第10版（1902年）

イギリスの著名な百科事典であり、信用調査機関を意味する「Mercantile Agency」が項目として取り上げられている。「倒産、譲渡や手形に関する情報を提供するために19世紀に作られた団体」に起源を持つ組合による、取引保護のための組織であると記載されており、第9版（1875年刊）までには信用調査業に関する記述はない。
Mercantile Agencyの日本語訳となる「興信所」は、わが国最初の信用調査機関である商業興信所を創業した外山脩造により、信用を興すという意味から訳された。

帝国データバンク史料館
〒160-0003 東京都新宿区本塩町22-8　TEL.03-5919-9600（直通）

ご来館の際は、1F受付にお越しください。

ご利用案内

［入 館 料］　無料
［開館時間］　10:00～16:30（入館は16:00まで）
［休 館 日］　土・日・月曜日および祝日、年末年始
（その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。）

交通のご案内

［ＪＲご利用］	中央線・総武線 市ケ谷駅	徒歩8分
	中央線 四ツ谷駅	四ツ谷口から徒歩9分
［地下鉄ご利用］	南北線・有楽町線 市ケ谷駅	7番出口から徒歩6分
	都営新宿線 曙橋駅	A4番出口から徒歩9分
	丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅	2番出口から徒歩9分

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し越しください。
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介しています。

www.tdb-muse.jp

帝国データバンク史料館だより《Muse Vol.27》2016年6月発行
©帝国データバンク史料館